

なお日置教授は後日東京の街路で、シャッターを開いてカメラを動かし、第1図と同じような特徴をそなえた断続する曲線群の写真を撮って下さった。

さてこれで名古屋で撮った「珍しい電光の写真」は、実は街路の放電灯の写真であることが判明したのであるが、同じようなものが外国の書物に載っているのが気になる。筆者が本誌の第14巻（1967年）第9号に紹介しておいた Frank W. Lane の“The Elements Rage”の第56図版がそれである。その写真は第1図の中の1本の曲線に似た明滅する曲線で、停電中であったことから、この写真が真実のもので、二重露出の結果出来たものではないと強調している。説明には「脈動する球電」と題が

つけられている。

また別に次のようなものもある。京都大学の田村雄一教授は、1960年9月19日22時ごろ京都市左京区下鴨芝本町で写された写真を示されたが、これも屈曲した2本の曲線の写ったもので、細い方の曲線は断続して点線となっている。これもまだ何かわからない写真である。

1940年からの前橋付近の雷雨特別観測の際に、当時中央气象台の加藤倫祐氏は、伊香保でひも状にからまった電光を写しておられるが、これは真実の電光の写真で、電光のだいたいの経路と、カメラの光軸とが一致した時におこる可能性の多いものである。

## 短報・通信欄の新設

天気の内容についてのアンケート（本誌14巻10号綴込）は、1月31日までに208通の回答があった。そこで中間集計を行なった結果、短報・通信欄の新設については、大多数の会員の賛成を得られるものと判断し、本号から実施することにした。執筆要領は下記のとおりである。ふるって投稿されるよう希望する。

なおアンケートのその他の項目については、さらにその後到着した回答と近日実施を予定している会員の抽出調査の結果を総合して最終的となりまとめをすることにした。御協力をいただいた会員に謝意を表する。

記

### 1. アンケートの結果

1月31日現在回答総数208（回答者所属別内訳 気象官署124、大学40、研究所24、その他20）、短報の新設（賛成174、不要15、意見なし16、白紙3）、通信欄の新設（賛成148、不要11、わからない11、意見なし31、白紙7）

### 2. 短報の執筆要領

速報性をとくに重視した短報欄を論文とは別に設ける。執筆要領は論文に準ずるが長さは原則として印刷1頁以内とする（400字詰原稿用紙約5枚が印刷1頁に相当、図表が入る場合はその分だけ本文の長さを調節する必要がある）。内容は小論文のほか、他雑誌に投稿した論文の要約、未完成ではあるがとくに速報を要する研究成果の概要等について投稿があれば掲載する。別刷は30部まで無償配布、それ以上は有料とする。

なお短報は原則として編集上可能な限り速やかに掲載する。したがって印刷の順序は原則として受理日順とするが、論文とは別個に取扱う。

### 3. 通信欄の執筆要領

会員の学会に対する要望・意見、論文に対する質疑・意見のほか気象に関係ある諸問題についての会員の自由な投稿を掲載する。1篇の長さは原則として印刷1頁以内とする。

（天気編集委員会）